校訂　金剛般若経集験記（三）

A revised edition of the Kon-gō-han-nya-kyō-shū-gen-ki (3)

山口敦史
今井秀和
迫田（呉）幸栄

Atsushi Yamaguchi
Hidekazu Imai
Sachie Kure Sakoda

凡例

一　凡例は、「校訂　金剛般若経集験記（一）」（「大東文化大学紀要」〈人文科学〉第五十一号、二〇一三年三月）に同じ。

25　睦彦通

（本文）

又曰、滑州別駕睦彦通、一生已來、恒誦金剛般若。先於李密下所任武牢縣令、爲賊翻城、欲殺縣令。通甚怕懼、踰城得出。向東步走、有一石崖、石澗高峻、深百餘尺。被賊拔刀走趂、卽投峻崖、欲自取死。至崖之半、似有人接、通及至于底、乃在盤石上坐、得存性命、都無傷損。據此靈驗、並是般若之力。賊過之後、通至家中、精心誦持、不捨晝夜。又勸化一切讀誦此經。通得長年、又無疾患、常得清淨、堅心不怠。

（校異）

なし

（大意）

また言うことには、滑州（河南省滑県）の別駕である睦彦通は、生まれてからずっと、常に『金剛般若経』を読誦していた。以前、李密の下で武牢（虎牢関）の県令に任ぜられたが、賊のために城をあけわたすことになり、（賊は）県令である睦彦通を殺そうとした。睦彦通は大変恐怖し、城を越えて脱出した。東に向かって走ると石の崖があり、谷底は高く険しく、深さは百余尺に及んだ。賊は刀を抜いて走り追いかけてくるので、とうとう険しい崖に身を投じて、自ら死のうとした。

崖の半分くらいに至って、人に受けとめられたように感じ、睦彦通は谷底に到達した。大きなどっしりとした石の上に座っており、生命がまだあって、まったく傷もなかった。このことは霊験によるとともに、あわせて般若の力である。賊が通過した後、睦彦通は家に帰り、心から（『金剛般若経』を）誦持し、それは昼夜止むことがなかった。また、一切の衆生に仏道を勧め、この経典を読誦させた。睦彦通は長命を得て、身体に病気もなく、常に心身の清らかさを保ち、堅い信心を怠ることがなかった。

26　李思一

（本文）

又曰、大廟署丞李思一、貞觀二十年正月八日丑時、得病已、時失音、至十三日、黄昏身死。乃被冥官勘、言思一年十九時、屠宰猪羊之命、思一推忖、「實不屠殺生命」。冥官卽追所殺猪羊、與思一勘對。至巳對問、食肉支節時日、全不相關。又付主司子細撿覈勘、遂殺害之日、思一卽在黄州慧珉法師下聽講涅槃經。然珉法師又以身死、生於金粟世界、既在三界之外、無可追證。放思一還於本土。至家未經時日、又被追喚。未去之際、於清淨寺玄通法師邊懺悔受戒。普勸朋友親戚、「有生之類、但遭枉濫死者、及不得轉讀經者、並爲轉讀金剛般若經五千遍」。作是語巳、遂卽命終。使者將思一至冥官所、遂具實言、今發心受持般若經。冥官云、「汝今發心極大深妙、不可思議」。須臾之間、見一人手持經卷、語思一云、「此是金剛般若」。思一求請開其經卷、覽其題目、與今時般若無別。當卽閉［音閉］目發心、望解般若經義、曉喩有知。忽聞有人云、「君今發心、作是大願、今所注猪羊來對者。並云、『我實自身命盡、惡道受生。實非思一屠害。爲無功德實貨求典、妄引善人、冀延日月、實是枉牽』」。冥官得此欵巳。又珉法師在金粟世界遣二僧、來至冥官前。得見二僧、驚怖禮拜。僧語冥官、「其思一誦持金剛般若經、一心不亂。又注屠殺生命、並云妄引。珉法師在金粟世界、故遣來救」。冥官依命、卽命思一還生。二僧乃送至家、卽乘空而去。思一蘇訖、當卽請諸寺大德、轉讀般若經五千遍。思一誦持般若、晝夜不廢、見得延年。

（校異）

珉（改意）―泯

（大意）

また別の話である。大廟署丞である李思一という人は、貞観二十年（六四六年）正月八日の丑時に、病を患ってしまった。時々声を失い、十三日に至って、夕方にその肉体は死んだ。すると、冥官から尋問を受けた。（冥官が）言うことには、思一は十九歳の年に、豚・羊を屠殺した。思一は考えて、（次のように）返答した。「本当に、殺生したことがないのです。」冥官はすぐさま、殺された（という）豚羊を追及して、思一（の言うこと）と検証・照合した。彼と（双方の言い分を）突き合わせたところ、肉を食した時の詳細と日時について、まったく（つじつまが）合わなかった。

また、主司に任せ、子細を厳しく取り調べてもらうと、（家畜を）殺した日、（なんと）思一は黄州の慧珉法師のもとで『涅槃経』を聴講していた（ことがわかった）。しかし、慧珉法師はすでに肉体が死んでおり、金粟世界に生きていて、すでに三界の外にいるとのことで、追って確認することができない。（よって）思一をもといたところに返した。家に戻ってあまり経ない内に、（思一は）また召喚された。まだ行く前に、清浄寺の玄通法師のそばで懺悔をし、受戒した。（そして）友人や親戚にしきりに説き勧めた。「非道に殺された者、経が転読できない者のために、『金剛般若経』を五千遍転読しなさい。」その言葉が終わった途端に、（思一の）命が途切れた。

使者は思一を冥官のところに連れて行き、遂に（彼の）言うことを実現させ、直ちに発心し『金剛般若経』を誦持した。冥官いわく、「あなたのただ今、発心したことは、大いに奥深く深妙で、不思議（なこと）だ。」少し時間が経ったところで、ある人が手に経の巻物を持って現れ、思一に語った、「これは『金剛般若経』だ」。思一が、その経の巻物を解くように頼み、題目を見ると、今の『金剛般若経』と違いがない。即座に目を閉じて発心し、『金剛般若経』の教えを望み通りに説くと、分かりやすく、よく理解できた。

突如、ある人がこのように言うのが聞こえた。「君がいま発心したことで大願がかなった。ただいま豚・羊が来たところだ。そしてこう言う、『私は、実は自分の寿命が尽き、悪道に受生（輪廻転生）した（だけのことだ）。実際のところ、思一に殺されたわけではない。功徳の宝貨がないため、よりどころが欲しくて、善人を巻き添えにし、月日を延ばした。実に偽りの申し立てであった。』と」。

冥官はこの告白を受けた。また、珉法師は金粟世界から二人の僧を行かせ、（彼らが）冥官の前に来た。（冥官は）二人の僧侶を見て、驚いて礼拝した。僧侶が冥官にこう言う、「この思一（というの）は、『金剛般若経』を読み、一心不乱である。また、命のあるものを非道に殺した件についても、言い掛かりであった。珉法師は金粟世界にいるゆえ、（我々を）遣いにやり、救いに来たのである」。冥官はその命令に従い、思一

は生き返ることになった。二人の僧侶は（思一を）家まで送り届けると、空に上って行った。思一は蘇生したら、すぐさま諸寺の高僧を請い、『金剛般若経』を五千遍転読した。思一は般若を読んで誦持し、日夜を問わなかった、それで、寿命を伸ばすことができた。

27　慕容文策

（本文）

又曰、秦州上邦縣人慕容文策、年十七、誦金剛般若經、齋戒不闕。隋大業七年四月十五日夜、忽有兩鬼、來至床前、手持文牒、云、「王今遣取公來」。文策卽甚忙怕、乃逐隨使者而去。將至一大城、樓櫓嚴峻、城墉六重、將入第一第二門、極大光明至第三門、其門相去四里、已上並皆黑暗、都不見道、使者引之而過、至五六門內、復大光明。去門三里、卽有宮室殿堂。四邊持仗宿衛、還如見在宮闕無異。王當殿而坐、所將男夫婦女、僧尼道士及女等外國六夷、不可稱數。策在後、行典唱名而過。王一一問其在生福業。有福效驗者、在西而立無福驗者、在東而立。末後始唱策名、王問、「一生作何福業」。策卽分疎、「一生已來、唯誦持金剛般若、法華八部、般若晝夜轉讀、又持齋戒、一日不闕」。王聞此言、合掌恭敬、歎言、「功德甚深」。付主司細檢文簿不錯、將來其典執案諮王、未合身死。王卽放還。且遣西行而立。未去之間、有一沙彌、可年十五六、手執一明炬、於策前而過。續後又一沙彌、執明炬而過。策卽捉袈裟挽住、「願師救弟子。使者錯追將來、蒙王恩澤、檢文簿放還。不知去處、願師慈悲、救護弟子、示其來路」。二僧語策、「檀越持般若經、轉讀大乘經典、好牢持齋戒、故來救之」。師云、「我執明炬在前、檀越但從我後」。還於六重城門而出、還詣黑暗二門。二僧手執明炬、喻如日出、光明皆現、出於六重門外。二僧卽語策云、「檀越知地獄所以否」。報云、「不知」。二沙彌卽舉手指城西北角、更有一大城、相去四里。「此是地獄之城」。二沙彌云、「將檀越於此城觀看」。從師至彼、其城高峻。有入城門、並鐵網垂下、有四羅剎、手執鐵叉、侍立左右。二僧云、「是地獄之門、一切罪人配入、並從此門而過」。卽將策入門、可行二百步、見一灰河、其中一切受苦之人、身在河中、唯見其頭、百千萬億猛火熾然燒此罪人、苦痛號叫、不可具說。又四邊皆是鐵床劒樹、有四獄卒、手持鐵叉、畔上行走。叫喚之聲、甚可怖畏。二僧云、「十八地獄、咸在此城」。策見心中怕懼、唯知念佛、心中恒誦般若不絕。二僧卽將策出城門、至於本來之道。五箇道相近、意中荒迷、不知本從家之道。二僧卽欲別策而去、禮拜求請、「五道之中、不知弟子從何道去、願師慈悲、示其道處」。二僧卽於中道引前、可行十里許、有一大門、塞其道口、不得而過。二僧以錫杖開之、卽語策云、「努力勤修功德、誦般若經、莫生懈怠、必得長壽」。策別師至家、體中醒悟。父母親知、並悉忙怕、以禮慰喻、說其因緣、蒙放還家、功德之力。聞者欣悅、心意泰然。以此誦經齋戒功德、勸化一切、各各發心、讀誦般若經、一日不闕、更加精進、又得長年。

（校異）

黒（改意）―里

（大意）

また別の話である。秦州、上邦県に、慕容文策という人が居た。年は十七歳、『金剛般若経』を読み、斎戒をやめることなく続けていた。隋の大業七年（六一一年）四月十五日の夜、突然、二人の鬼が現れ、寝台の前に来ると、手に文書を持って、こう言った。「（閻羅）王がただいま、お前を捕まえる為に、私たちを遣わしたのだ。」文策は非常に慌てて恐れ、使者の後を追った。とある大きな城にたどり着くと、（高）櫓が高く険しく聳え立ち、城郭が六重もあり、第一と第二の門を通る時は、とても明るかった。第三の門に至ると、門までの四里は真っ暗で、道が全く見えず、使者に引かれて通った。第五、第六の門の中に至ると、また明るくなった。

門から去って三里（のところに）宮殿があった。四方に仗を持った衛兵がいて、まるで皇帝の宮殿と相違ない。王が宮殿（の真ん中）に座り、そこには男、女、僧侶、尼、道士、女道士等、外国や異民族（の人）がいて、数が数え切れない。策は後ろにいて、行典に名前を呼ばれ、王の前に通された。王は一人一人に生きている時の福業（よい行い）について訊いた。福があって霊験のある人は西に発ち、よい霊験のない人は、東に発った。最後の最後にやっと策の名前が呼ばれると、王はこう訊いた。「一生、どのような福業をしたか」。策はこう言った。「人生これまで、唯々『金剛般若経』『法華経』八部を読み、『金剛般若経』は昼夜問わず転読し、斎戒を続け、一日もやめることはありませんでした」。王はこのことばを聞き、合掌して厳粛に敬意を表すと、感心してこう言葉を発した。「なんという功徳の深さだろう」。

主司に任せ、生死の帳簿で子細を確認し、誤りなく、それ（その証拠となるところ）を王に（見せ）、この案について王に諮ってもらうと、（確かに）まだ肉体の死期ではなかった。王は即、彼を放免することにした。そして、彼を西の方に発たせた。発つ前に、十五、六歳ほどの沙弥が一人、手に灯りを持ち、策の前を通った。続いて、もう一人の沙弥が来て、（同じく）灯りを持って通った。策は（沙弥の）袈裟を引っ張って言った。「師よ、弟子である私を助けてください。使者が間違って（私を）牽引して、連れてこられたが、王の深いお情けにより、帳簿を点検し、放免してもらえることになりました。（しかし）帰り道が分からず、願わくは師の慈悲をもって弟子を助けてください。その来た道（戻り道）を示してください」。

二人の僧侶は策にこう言う。「壇越（信者）は『金剛般若経』を読み、大乗経典を転読し、斎戒を厳密によく守っていたゆえに、助けに来た」。師は言う、「私たちは灯りを持って前を歩くので、信者は我々の後ろに従え」。六つの城門をたどって、暗い二つの門も通った。二人の僧は手に灯りを持ち、まるで太陽が照らしてくれるように、光明がすべてをあらわすので、六つの城門の外に出られた。

二人の僧は策に語りかけて言う。「信者は地獄のありかは知っているか？」返事として言う。「分かりません」。沙弥二人は手を上げて城の西

北の方を指さすと、更に大きい城が（ここから）四里ほどのところにある。「あれは地獄の城だ」。沙弥二人は言う。「信者にこの城を見せよう」。師に従ってそこに至ると、その城は高く聳え立っている。城門を通ると鉄網が垂らされており、羅刹四人が手に鉄叉を持って左右に立っている。二人の僧は言う。「（ここは）地獄の門であり、すべての罪人の差配は、この門を通るのだ」。それで、策にその門をくぐらせた。二百歩ほど歩いたところにある灰色の川を見ると、中にいる全ての人は苦しみを受けていて、体は川の中にあって頭が見えるだけで、百千万億の猛烈な火がこれらの罪人を焼き、苦痛の怒号や叫びは、詳しく説くことができないほど悲惨であった。周囲全ては鉄床剣樹であり、四人の獄卒がいて、手に鉄叉を持ち、川沿いを歩いている。叫び声は非常に怖ろしいものだった。

二人の僧は言う。「十八層の地獄はすべてこの城にある」。策は（これを）見て心から恐怖し、ひたすら念仏することしか知らなかった。心の中で『金剛般若経』を絶えず唱えると、二人の僧が策を城門の外に連れ出し、もと来た道に至った。（しかし）五叉路がどれも似ていて混乱し、もとの家に戻る道が分からない。二人の僧は策を置いて行こうとした。（策は）礼拝し教えを請うた。「（この）五つの道の内、どの道に行けばいいのか、弟子には分かりません。師の慈悲によって、道なるところを示してください」。二人の僧がすぐに真ん中の道に導くと、十里ほど進んだところに大きな門があったが、道の先を塞がれていて通れなかった。

二人の僧は錫杖で（門を）開け、すぐに策に語りかけた。「勤勉に功徳を修めるように努力し、『金剛般若経』を読み、一生怠けることがなければ、必ず長寿を得ることができる」。策は二人の僧侶のもとを辞し、家にたどり着くと、肉体が目覚めた。父母、親戚は（これを）知り、みな一様に慌てて恐れると、礼を尽くして慰労した。（策は）王の放免のお陰で家に帰してもらった、（これも）功徳の力のゆえであると説いた。聞くものは（みな）喜び、心も落ち着いた。このことによって（策は）『金剛般若経』を読み、斎戒を続け、功徳を積み、周囲を勧化し、おのおのに発心させ、一日もやめることなく『金剛般若経』を読誦し、さらなる精進をすると、長寿を得た。

28　袁志通

（本文）

又曰、天水郡隴城縣袁志通、年未弱冠、住持斎戒、讀誦法華金剛般若等經、六時禮懺、不曾有闕。年二十、卽點入清德府衞士、名掛軍團、奉勑差征白蠻。從家至彼一萬餘里、在路晝夜禮誦不闕。至南蠻之界、官軍戰敗、兵士散走。當時徒侶一百餘人、不知所投、多被傷殺。志通惶迫、奔走無路。忽有五人、並乘牝［頻殞反］馬、在通前後。有一人走馬告通曰、「莫怕莫懼、汝具脩功德、前後圍繞、不能爲害」。行可七里有餘、至一塔廟、卽入其中藏隱、蠻卽還營。忽有二僧來通所、語通云、「檀越誦金剛般若法華、禮念諸佛、不可思議、故遣救汝。向者五人、乘馬在汝前後者、並是法華般若之力。亦同救汝怨賊傷害汝身、好脩福業、誦持經典、莫生懈怠。一切諸善神王、恒相衞護」。作是語訖、卽乘空而去。通經日不得食、

非常飢乏。須臾有二童子、將一鉢飯并醬菜及餅、與通而食。食訖又告通、「勤脩功德、誦般若經、莫令廢闕」。語訖主乘空而去。通涕淚悲泣、深心懺悔、卽投大軍。頻經三陣、不被寸鐵所傷。據此因緣、並是法華般若之力。於後蠻破、官軍放還、專心誦持法華般若、不敢怠慢。

又曰、貞觀八年正月二十八日、身患、至二月八日夜、命終。遂被將向王前、閲過徒衆甚多、通在後而立。其典唱名、王卽問其善惡之業、亦依次而配。末後始唱通、具問生存作何福業。通卽啓王言、「一生已來誦持金剛般若法華經等、常持齋戒六時禮佛」。王聞此言、卽合掌恭敬、歎言、「善哉、善哉。此人功德不可思議」。語使者當取之日、據何簿帳而追。付主司、細撿文籍、不枉將來。其主司開天曹檢報、「此人更有六年壽命、未合卽死」。王乃索案自尋、果然非謬。語左右侍者、取床几將來。卽於南廂持金床玉几、至王前。卽遣殿上西邊安置、鋪種種氈褥、遣通上床誦經。便誦般若法華各一卷、並悉通利。又使典藏中取其人誦經及修功德文簿。典與通。向西廂遂往取、可行二里、有大經藏、所有功德簿帳、咸在其中、並七寶嚴飾。使者於最下中取得一卷、可有十紙、題名袁志通造功德簿。卽持向王邊開檢、其中注通誦般若經一萬遍、禮佛齋戒功德、總在其中。王語使人、「其通所造功德、甚深甚深。將地獄觀看、知其罪福」。使者奉勅、引通出城、西北五里有餘、有一大城、樓櫓却敵、鐵網垂下。門中有四獄卒、頭如羅剎、身形長大、手持鐵叉、左右而立。有二銅狗、在門兩廂、口吐融銅、流灌獄所、注射罪人。一切受苦之人、並從此門而入。十八地獄、並在此城。通見如此、身心戰慄、無以自安。領將詣王、白言見地獄訖。王語通云、「汝今具見受罪福業、好勤精進、讀誦莫廢。汝今有命六年在、放汝還家、莫生退心、落入惡道、無人救汝。必須讀誦不退菩提、放汝長年。至老命終、必生淨土」。

（校異）

通（高）―通過

帳（改意）―悵

（大意）

また別の話である。天水郡、隴城県の袁志通は、二十歳未満にして齋戒を守り続けてきており、『法華経』『金剛般若経』等の経を読んで六時礼懺を行い、絶えることがなかった。二十歳のとき、すでに、清徳府の衛士に指名されて軍団に所属し、命令に従って白蛮を討つことになった。そこまでの一万里あまりの間、昼夜を問わず礼誦（礼拝・読誦）を絶やすことがなかった。南蛮との境に至り、官軍は戦に破れ、兵士は散って逃げた。当時、（残された）仲間が百人あまりいて、どこに行けばいいか分からず、その多くは殺されたり、傷つけられたりした。袁志通も恐れ慌てて、（逃げ道が分からず）どこにも行けなかった。突然、牝馬に乗った五人（の人物）が現れ、袁志通の前後を走っている。

（その内の）一人が馬を近付け、袁志通にこう告げた。「怖がることも、慌てることもない。汝は功徳を修得している為、（我々は汝の）前後

を囲んで、（誰も）危害を加えることができない」。七里あまり行ったところに塔廟が一つあり、中に入って隠れると、蛮族はやがて本営に戻った。突然、二人の僧侶が袁志通のところに来て、こう言った。「檀越（信者）は『金剛般若経』と『法華経』を（よく）よみ、諸仏に礼を尽くし、念仏を唱えた。それは素晴らしいことであり、よって汝を救う為に遣わされたのである。汝の前後で馬に乗っていたさきほどの五人は皆、法華及び般若の力によるものである。また同じく汝を救い、汝の身に凶悪な賊や傷害が及ばないように（とのことだったのである）。よい行いを修め、経典を誦持し、一生怠けることのないようにしなさい。諸々の善神王は、常に汝を守ろうとする」。そのことばが終わった途端、すぐに空へと上っていった。

袁志通は数日、何も食べられずに、非常に飢えていた。（すると）すぐさま童子二人が現れ、茶碗一杯の飯とともに漬け物と餅を袁志通に与え、食べさせた。食べ終わると袁志通にこう告げた。「功徳を勤勉に修め、『般若経』を読み、一時もやめることのないようにしなさい」。言葉が終わると（また）空に上っていった。袁志通は号泣して心より懺悔し、すぐに大軍隊に身を投じた。次々と三つの戦を経ても、まったく傷付けられることもなかった。これらの因縁は、すべて法華と般若の力によるものだ。のちに蛮族を破った後、官軍（の職）が解かれてから、『法華経』『金剛般若経』を一心不乱に誦持し、怠慢することがなかった。

また別の話である。貞観八年（六三四年）正月二十八日、（袁志通は）病気を患い、二月八日夜に至り、命が絶えた。それで（地獄の）王の前に連れて行かれると、（そこには）検閲された人が大勢いて、袁志通は後ろに立っていた。行典（役人）に名前をよばれると、王が直ちにその生前での善悪の業について訊き、それによって順に差配した。最後に（やっと）袁志通を呼び、生前、どんな良い行いをしてきたかをつぶさに訊いた。袁志通は王の質問に対して（こう）答えた。「これまでの一生、『金剛般若経』と『法華経』等を誦持し、常に斎戒を守り、一日六回仏に礼拝をしていました」。王はその言葉を聞くと、すぐに合掌して敬意を表し、こう賞賛した。「よいことだ、よいことだ。この人の功徳はまことに素晴らしい」。

（袁志通を）捕らえてきた日は何の帳簿を根拠にしたかを使者に問うと、（再び）主司に任せて書籍で詳細を検証させ、このさき（の手続き）を間違わないようにした。その主司は、天曹に問い合わせて確認し、報告した。「この人はさらに六年の寿命があって、まだ死期ではありません」。王が（この）案件を自ら確認すると、確かに相違なかった。左右の使いの者に机と椅子を持ってこさせた。直ちに南のひさしから金の椅子と玉の机を持ってきて、王の前に至った。そして宮殿に近い西側に安置させ、様々な絨毯や毛布を敷き、袁志通をその上に座らせ、経を読ませた。

（彼は）『金剛般若経』と『法華経』を各一巻読み、実によく理解していた。また行典を（使者として）遣わし、（袁の）読誦および功徳についての記録を取り寄せた。西のひさしに向かわせ、取りに行かせた。二里ほど歩いたところに、ある大きな経蔵があって、すべての功徳についての帳簿は全部この中に収められており、（その建物は）七宝で綺麗に飾られている。

使者は一番下の真中辺りから一巻を取った。十枚あり、題は「袁志通造功德簿」である。直ちにそれを王に持って行き、（王が）点検すると、その中に、袁志通が『金剛般若経』を一万遍読んだり、仏を礼拝したり、斎戒を続けたりしているなどの功德が、すべて記載されている。王は使者にこう言った。「袁志通が修めた功德は、まことにまことに深いものである。これから地獄を見せてやり、その罪と福のありさまを知らせよ」。

使者はその命令をうけ、袁志通を城に連れ出した。西北五里あまりに行くと、大きな城があり、櫓は敵を近寄らせず、鉄網が垂らされていた。門の内に四人の獄卒があり、頭は羅刹の如く、長身で体が大きく、手に鉄叉を持って左右に立っている。二匹の銅の犬がいて、門の両端で、口から溶けた銅を吐き、地獄中に流し込み、罪人にかけている。苦痛を受けるすべての人は、みなこの門から入る。十八の地獄は、全部この城にある。袁志通はそのさまを見て心身に戦慄を覚え、心が落ち着かないでいた。

王のもとに戻ると、地獄を見てきた感想を正直に述べた。王は袁志通に言った。「汝は今、つぶさに受罪福業のありさまを見てきただろう。経を読んで誦持することを絶やすな。汝には今、六年の命があるので、放して家に帰すが、怠ける心を生じさせることのないようにせよ。悪道に落ちれば、誰も汝を救うことはできない。必ず経を誦持し、菩提を退けることがなければ、汝を放って長生きさせよう。老いて命が尽きれば、（そのとき）必ず浄土に生まれよう」と。

29　吳思玄

（本文）

朝請大夫行國子監大學博士吳思玄、常誦金剛般若波羅蜜經。初日別兩遍、五六年後、卽日別一遍。兄思溫以長安元年任漢州縣竹縣令、染患入京醫療、寄在殿中省尚藥奉御張慶家針灸、忽然病發、非常困重。張慶絽攝諸巫術之士、時有務州褚細兒、亦甚見鬼、在慶中庭、爲溫祈禱、其時著緋官數人。思玄在別處止宿、人報兄患發、奔走來看。先至慶中庭、亦同祈請、未曾與褚相識。褚遂云此官不知何人。諸鬼神見之皆悉散走。思玄聞此、倍加精勵念誦。一二日間、兄病遂差。初思玄去萬歲登封元年行至中渭橋、見一人甚老、著重縗［音催］服、恠而問之。老人云、「某乙年八十二、爲親生母著服、母年一百七歲、近日始亡」。復問作何將養、得此長壽。其人報云、「孃年四十三時、有人敎誦金剛般若波羅蜜經、每日兩遍、從少至老、未曾暫闕。更有阿姨并及隣母、總有四人、同業相共受持。姨亡已經一年、壽一百十四歲。自餘兩箇、今各年九十已上、至今竝在」。［吳思玄親自錄出］

（校異）

なし

（大意）

朝請大夫にして、かつ国子監大学博士でもある呉思玄は、常に『金剛般若波経』を読んでいた。最初は一日に二遍を読んでいたが、五、六年後には、一日一遍を読むようになった。兄の思温は、長安元年（七〇一年）、漢州県竹県令の職に就いたが、病気にかかり、都に入って治療を受けることになった。殿中省、尚薬（局）奉御の張慶の家に泊まり、針治療を受けていた。

突然、（病気の）発作が起き、非常に重いものとなった。張慶は諸々の巫術を使える者を統括していたが、ちょうどその頃、務州の褚細児（という巫術師）が、よく鬼を見ていた。（褚細児が）張慶の家の中庭で呉思温のために祈祷していると、赤い服を着た官吏が何人かいた。呉思玄は別の所に泊まっており、人から兄の発病の一報を受けると、急いで走って見に来た。真っ先に張慶の中庭に行って、（褚細児と）ともに祈祷をした。褚細児とは、まったく知り合いではなかった。褚細児は（呉思玄に）、この官吏（たち）は何者なのかと訊いた。諸々の鬼神は、彼を見ると逃げ去った。呉思玄はこれを聞くと、さらに倍の精を出して経を読んだ。十二日間（読み）、兄の病気はようやく良くなった。

ことのはじめは、去る萬歳登封元年（六九五年）、呉思玄が渭橋の途中に至ったところで、おごそかな喪服を着ている（かなり）年を経た人を見かけて、奇妙に思って近付き、問いかけた（ことによる）。老人は言った。「それがしは、乙年（七〇一年）で八十二歳になる。最近、一〇七歳にして亡くなった母のために喪に服しておる」。（呉思玄は）何をしたことによって、（老人の母親が）長寿を得られたのか、再び問いかけた。老人は答えた。「母は四十三歳の時、ある人から『金剛般若波経』を読むことを教わり、毎日二遍、若い時から年を取るまで、止めることがなかった。さらに、おばと隣母の総勢四人が、ともに『金剛般若波経』を読んでいた。おばは既に亡くなって一年、一〇四歳だった。あとの二人は存命で、今はそれぞれ九十歳以上、なお健在である」。［呉思玄本人による記録］

30　釋德遵

（本文）

申州大雲寺僧釋德遵者、卽義陽縣人也。時年五十一二、染疾彌留、氣力虛惙。時起彼有張照藏者、洞曉陰陽、有張則者、極明醫術。推步年命、以爲厄運之期、診［音軫］侯經脈［音麦］、治非針藥之救。遂啓請發願、誦金剛般若經。力疾扶羸、日數十遍。誠心懇至、感乎幽明、却倚蒲團、因而彌勵、不捨晝夜、誦持此經。未盈旬月、漸覺瘳［音抽］愈。將涉時序、了然痊復。長安三載、獻忠任申州司戸、其僧尚存。向逾七十。每見自說、嗟嘆者久之。德遵自此之後、常以般若爲務。則知大乘之力、豈術數能知。非夫淨信通神、達空體妙智、該上士者、焉肯勤而行之乎。

（校異）

麦（高）―麥
抽（改意）―柚
士（改意）―上

（大意）

申州、大雲寺の僧、釈徳遵は、義陽県の人である。五十一、二歳の時に病気にかかり、全身に気力がなくなって衰弱し、死にかけた。その時、彼に近しかった張照蔵という者が陰陽の理に詳しく、張則という者が医術に非常に明るかった。（張照蔵が）寿命について調べると、（今はちょうど）運勢の悪い時期で、（張則が）脈をはかって診察すると、針や薬の力で治せるものではなかった。そこで発願の心を起こし、『金剛般若経』を読みはじめた。病にかかり、支えて貫わなければ立てないほど弱っていたが、一日数十遍読んだ。誠心誠意、幽明の世界を感じながらも蒲団にきちんと座り、勤勉につとめ、昼夜問わずに『金剛般若経』を誦持した。

一ヶ月未満で、段々病気がよくなると感じた。季節が変わる頃に、完全に回復した。孟献忠（『金剛般若経集験記』作者）は長安に三年いて、申州司戸に着任したが、（その頃）その僧侶（釈徳遵）はまだ生きていた。七十歳を過ぎていて、会う人会う人に（この）自分の話を説いており、感心する者が多かった。釈徳遵はそれ以降、『金剛般若経』を読むことをつとめとした。これによって知ったのは、大乗の力は医術や陰陽によってはかれるものではない（ということだ）。信心強く神に通じ、空体妙智の境地に達している、このような仏法を極めた人でなければ、かくも勤勉につとめられただろうか。

31　杜思訥

（本文）

杜思訥者、京兆城南人也。任潞州銅鍉［音提］縣尉、考滿之後、年登七十、又染瘦病、日漸虚羸。當時名醫、咸謂難濟、雖加藥餌［音二］、診候未瘳。時權瓘［音貫］注得漢州司功之任、就別臨訣［音決］之際、詞氣悽［音妻］涼曰［音越］、「雖是生離、卽成死別」。然宿心正信、發始深誠、遂謂瓘曰、「唯發願誦般若經、將希生路」。遂卽發心誦金剛般若經、不逾時月、漸覺瘳［音抽］愈。懇誠彌勵、屢［力芋反］見光明。瓘後入京、訥已痊復、靜惟福力、不可思議。［漢州司功權說］

（校異）

權（黒）―權令瓘

（大意）

杜思訥という者は、京兆城南の人である。潞州銅鍉県尉に任命され、考満の役職を経て七十歳になると、重い病気にかかって日に日に衰弱していった。当時の名医たちからも治すのは難しいと言われ、薬による治療を受けてはいるものの、しばらくしても良くなる兆しはなかった。その時、権瓘は漢州司功につくことを任命された。別れる際の挨拶で（杜思訥は）、凄惨な口ぶりでこう言った。「（今は）生き別れだが、やがて死に別れになるだろう」。

しかし、心に真っ直ぐな信念を宿し、深い真心を発すれば、と（考えて）、権瓘はこう言った。「ただ発心して『金剛般若経』を誦持すれば、生きる道を望めるだろう」。そこで（杜思訥は）発心すると、『金剛般若経』を読み、一ヶ月も経たないうちに、病気が段々良くなってくると感じた。さらに誠心誠意、勤勉につとめていると、たびたび光を見た。のちに権瓘が都に入った時には、杜思訥はすでに回復していた。静かにただ、福の力（によるもの）で、素晴らしいことである。［漢州司功である権瓘による。］

（本文）

贊曰、恭惟衆聖、爰起三堅、一塵一劫、無量無邊。寧惟萬萬、何止千千。不生不滅、非代非年。

金剛般若經集驗記卷上

（校異）

なし

（大意）

賛にいう。うやうやしくも思うに、ここに身・命・財の三種の堅法を起こせば、一微塵は一劫ほどの、とてつもなく長い時間になり、はてしがない。幾万にも、ただ幾千にも（絶えることがない）。不生不滅のさとりの境地は、時代を超え、年月を越える。

（本文）

金剛般若經集驗記卷中

梓州司馬　孟獻忠　撰

滅罪篇第三（并序三章）　神力篇第四（并序十六章）

滅罪篇第三（并序三章）

夫三界虚妄、一心所作、心在分別、一切俱邪、心絶攀縁、則萬殊皆正。夫心者、不内不外、亦不中間、心垢則衆罪咸生、心淨則衆罪同滅、禍福不牽於物、垢淨必在於心。故上士忘心、見諸相而非相、達人齊觀、悟非色而非空。由是犯律比丘、頓除疑悔、破戒菩薩、還入聖流。然則業以心成、罪随心滅、式廣普賢之路、爰申滅罪之篇。

（校異）

なし

（大意）

滅罪篇第三（并序三章）

そもそも、欲界・色界・無色界といった三界世界は、むなしい迷いの世界であり、（衆生の）一心不乱におこなうふるまいは、心にさかしらな理解を宿す。（結局）一切はすべてよこしまな行いにつながるので、心は俗事への執着を絶てば、そこで、色々あるすべてがみな、正しい道に通じるのである。

そもそも心とは、内界の事物でもなく外界の事物でもなく、また中間の事物でもない。煩悩は多くの罪をあまねく発生させ、心の正しい理解は多くの罪を一緒に消滅させる。災いと幸福は物質的なものとは関係なく、煩悩も無煩悩も必ずその心のなかにあるのである。

よって、尊い人は心に徹しており、さまざまな相貌を見ていても、それは正しい姿ではないと感じる。達人は等しく見ており、色ならざるものを悟ったように感じても、それは空ではない（とわかる）。

このため、戒律に違反した僧侶であっても、いっぺんに疑いや後悔の念が除かれ、戒律を破った菩薩でも、煩悩から脱却して聖者の系譜に入ることができる。そうであればよって、人間のなす一切のふるまいは心のありかたによって成り立ち、人間の犯す罪は心のありようによって滅び去るのである。よって、仏の慈悲の路を拡げていくため、ここに滅罪篇を申し上げる。

1　法藏

（本文）

蕭瑀金剛般若靈驗記曰、鄜［音敷］州實室寺僧法藏、戒律清淳、慈悲普行。隋開皇十三年、於洛交縣葦川城造寺一所、僧房二十餘間、佛殿講堂等三口、並七架六袱［音伏］、塼瓦砌飾、修理華麗、丈六大像三軀、總有四鋪、鋪皆十一事、莊嚴不可思議。觀世音石像一軀、金銅隱起、千佛屏風等、並莊嚴成就。至大業五年、勅但是諸處佛堂之內佛像者、並移州內大寺、伽藍補壞修理並已成就。法藏又造一切經、已寫八百餘卷、造長度紙、於京城月愛寺抄寫、檀軸精妙。法藏至武德二年閏五月內、得患困重、經餘二旬、乃見一人、青衣服飾華麗、在高樓上、手持經一卷、告法藏云、「汝一生已來、造大功德、皆悉精妙。汝今互用三寶物、得罪無量。我所持經者、是金剛般若、汝若能自造一卷、至心誦持、一生已來、所用三寶物罪、並得消滅」。藏卽應聲、「若得滅罪、病又瘳［音抽］差、卽發深心、決定敬寫金剛般若百部、誦持不廢」。又云、「一生已來、雖作功德、未曾抄寫金剛般若經。諸佛覺悟弟子、唯身上所有三衣瓶鉢等、卽當盡捨、付囑大德。自知病重、遺囑弟子及親知、爲造金剛般若經百部。舍婆提城舍衛國、各中半抄寫並莊嚴了訖、散與一切道俗讀誦。般若威力、不可思議、救拔一切衆生」。作是語已、藏卽命終。將至王所。具問一生作何福業。藏卽分疎、「造佛像、抄寫金剛般若百部、施一切人轉讀、兼寫餘經八百卷、晝夜誦持般若、不嘗廢闕」。王聞此言、「師造功德極大、不可思議」。卽遣使藏中取功德簿、將至王前。王自開檢、並依藏師所說、一不錯謬。王言、「師今造寺佛像、抄寫經典、及誦持般若、功德圓滿、不可思議。放師在寺、勸化一切讀誦般若、具修一切功德、莫生懈怠」。師得長壽。後命終之日、卽生十方淨土。

（校異）

三（改意）―一

度（改意）―な

高（黒）―當

（大意）

蕭瑀の『金剛般若経霊験記』所収の話である。鄜州、実室寺の僧侶である法蔵は、戒律を守り、清らかで質素であり、慈悲深く善行につとめていた。隋の開皇十三年（五九三年）に、洛交県の葦川城に寺を一つ建てた。僧侶（用）の部屋が二十数室、仏殿や講堂などが三つ、（寺の屋根には）七つの桁と六つの梁があって、屋根には（焼いた）煉瓦が使われ、階段には飾りが付けられ、華麗に整備されている。

丈六仏（一丈六尺の仏像）が三体あり、それぞれに四つの金具が付いており、全部で十一個あった。（その様子は）荘厳であり素晴らしいも

のであった。観音の石像が一体あって、金、銅が隆起しており、千仏（千体仏）の（描かれている）屏風なども、荘厳に出来ていた。大業五年（六〇九年）、勅により、諸々の場所や仏堂内にあった仏像をみな、州内の大きい寺に移し、伽藍の壊れたところを補強、修理し、すべてが完成した。

法蔵はまた、一切経を作った。長い紙を作って、すでに八百余りの巻を書写した。都（大興）の月愛寺にて書写し、その檀木の軸は精妙であった。装飾品も華麗であり、高い楼の上にいて、手に経一巻を持ち、法蔵に告げてこう言った。「汝はこれまでの一生、大いに功徳を作り、みなすべてが精妙であった。（しかし）汝は今、三宝物（佛、法、僧）をそれぞれ使い、犯した罪は計り知れない。それがしが手にしている経は『金剛般若経』である。汝がもし自分で一巻を作り、心をこめて誦持すれば、これまでの一生に、三宝物を使用してきた罪を取り消すことができる」。

法蔵はすぐさま声を出して返事した。「もしも滅罪となって、病も治すことができるのなら、直ちに深心（浄土に生まれる者が備える三心の一。念仏すれば往生できると深く信じること）を発し、敬意を持って『金剛般若経』を百部書くことに決め、誦持することを止めません」。さらに、こう言った。「これまでの一生で功徳を作ってきたが、『金剛般若経』を写したことはありませんでした。諸々の仏が、仏弟子である自分を覚悟させてくれたので、わずかに身にある三衣、瓶（水筒）、鉢など、すべてのものを、いますぐ全部捨て、ほかの高僧に託します。病は重いと自覚しており、私の弟子および近しい人々に遺言を残し、『金剛般若経』を百部作ってもらいます。「舎婆提城」そして「舎衛国」、それぞれ半分ずつ、荘厳に書き写して終わらせたら、世俗の者たちに配り、読誦して貰います。般若の威力は実に素晴らしいものであり、衆生すべてを救済するものです」。

（その）言葉が終わると、法蔵の命は絶えた。（そして）王（閻羅王）のところに至った。一生どんな福業（良い行い）をしてきたか、つぶさに訊かれた。法蔵はすぐに、大まかに説明した。「仏像を作ったり、『金剛般若経』を百部書き写したり、世俗の者たちに転読して貰ったり、さらに八百巻あまりの経を書き写したり、昼夜問わず『金剛般若経』を誦持して、止めることがありませんでした」。王はこの言葉を聞いた（上で、こう言った）。

「師の作った功徳は実に大きい。まことに素晴らしい」。すぐに使いをやり、蔵の中から功徳の帳簿を王の前にとってこさせた。王が自ら（帳簿を）開いて点検すると、法蔵のいう通りであって、一つも間違いがなかった。王は言った。「師が今、寺や仏像を作ったり、経を書き写したり、『金剛般若経』を誦持したり（したことにより）、功徳は円満であって、まことに素晴らしい。師を寺に返す。世俗の者みなに『金剛般若経』を誦持することを勧化したり、つぶさに一切の功徳を修めたりして、怠ることのないように」。師は長寿を得て、最期の日を迎えた後すぐ、十方浄土に生まれたのである。

2　沈嘉會

（本文）

郎余令冥報拾遺曰、前校書卽吳興沈嘉會、太宗時以罪徒配蘭州。自到已來、每思鄉邑、其後日、則禮佛兼於東南望泰山禮拜、願得還鄉。經二百餘日、永徽六年十月三日夜半、忽見二童子、儀容秀麗、綺衣執袴、服飾鮮華。云、「兒等並是泰山府君之子、府君媿先生朝夕禮拜、故遣迎接、卽須同行」。嘉會云、「此去泰山三千餘里、經途遠、若爲能到」。童子曰、「先生但當閉目、兒自有馬」。嘉會卽依其言、須臾而至。見宮闕廊宇、有若人間。引入謁拜府君、府君爲之興、須臾之間、延入曲室、對坐言語、無所不盡。府君說云、「人之在生、但犯一事、生時不發、死後冥官終不捨之。但能日誦金剛般若經、大得滅罪」。又云、「前有一府君、爲坐貪穢、天曹解之」。問知今府君姓劉［音流］、不敢問字。謁見之後、每夜恒與嘉會雙陸、兼設餚饌。嘉會如廁、於小廳東頭、見姑臧令慕容仁軌執笏［音忽］而坐。嘉會召問之。云、「不知何事、府君追來已六十餘日」。嘉會還、爲府君言之。府君令召仁軌、謂之曰、「公縣下有婦女阿趙、行私縣尉、他法拷殺。此嫗來訴縣尉、遂誤追明府君耳」。府君庭前有一大盆、其中貯水、令仁軌洗面、乃賜之食。食訖云、「欲遣兒送明府、恐爲群凶所逼」。乃自命一兒、故送仁軌。雙陸七局、其兒便還、云已送訖。又云、「慕容明府不敢坐於大堂、今居堂東頭一小房內」。嘉會卽辭府君、府君放去。嘉會具爲州縣官言之、州官初不之信。蘭州長史趙持滿、故令人於姑臧訪問仁軌。仁軌云、「從去九月內、得風疾、手足煩疼。遂便灸灼三十餘處、家人覺其神彩恍忽。十一月初、便得療損」。校其日數、莫不闇同。縣尉拷殺阿趙事皆實錄、縣尉尋患、旬日而死。初嘉會謁見府君之時、家人但覺其神爽昏耄而已、而每日誦金剛般若經、以爲常業。尋還本土、至今現在。［丘貞明說、余令後見嘉會所說亦同］

（校異）

沈（黑高）―沈
迎（黑）―近
入（黑高）―人
軌執（黑高）―軌
拷（黑高）―捣
君（黑）―若

（大意）

郎余令『冥報拾遺』所収の話である。前校書では、すなわち呉興の沈嘉会（という者）が、太宗の時、罪で蘭州に配された。着いてからは郷里を思い出すばかりであり、その後も、仏を礼拝するということで東南の方向を向いては、（つまり）泰山に向かって礼拝し、郷里に戻れるよう願っていた。二百何日が過ぎ、永徽六年（六五五）十月三日の夜半、突如、童子二人を見た。容姿が美しく、模様の入った上着と袴を身に着けており、装飾品も華やかで綺麗だった。（童子は）こう言った。「われらは泰山府君の使いの童子です。府君は先生の朝晩の礼拝を申し訳なく思い、ゆえに（われらを）迎えに遣わしました。必ず一緒に来てください」。嘉会は言った。「ここから泰山まで三千里余り。行く道がこんなにも遠いのに、どうやって行くのでしょうか」。童子はこう言う。「あなたさまがただいま目を閉じていれば、こちらで用意した馬があります」。

嘉會が言われた通りにすると、瞬く間に着いた。宮殿や建物を見ると、まるで人間界（にあるもの）と同じだった。中に案内され、府君に会うと、府君はそれを喜んだ。瞬く間に、密室に招かれ、（中に）入った。向かい合って話すと、（話題は）尽きることがなかった。府君は次のように語った。「生きている時にたった一つの悪事を犯し、たとえ生前それが発覚しなくとも、死後の冥官はそれを捨て置きません。ただし、毎日『金剛般若経』を読めば、大いに滅罪となるのです」。またこうも言った。「以前は、ある府君が穢れて欲張りであったため、天の神によって（職を）解かれました」。尋ねて知ったのは、今の府君の名字が劉ということだったが、字を訊ねるのを恐れて下の名前は訊けなかった。謁見してから毎晩、常に沈嘉會と（泰山府君は）雙陸棋（双六の一種）をし、美食美酒の席が設けられた。

沈嘉会は厠に立った際、小さい部屋の東側の先に、姑臧令の慕容仁軌が笏を持って座っているのを見かけた。沈嘉会は手招きして話をした。（慕容仁軌はこう）言った。「何事か分からないまま、府君に求められて（ここに）来て、すでに六十日あまりなのです」。沈嘉会は（席に）戻って、府君にそれを伝えた。府君は令を出して慕容仁軌を呼び、このことを言った。「（慕容仁軌の）県下には阿趙という婦人がいたが、県尉が私利を図ると、（彼女を）拷問にかけて殺した。その老女が県尉を訴えに来たので、それで姑臧県令である慕容仁軌、あなた様を誤って捕らえてきてしまった次第です」。（泰山）府の庭前には大きなお盆があり、その中には水が溜められていた。慕容仁軌に顔を洗わせると、食事を与えた。食事が済むと、（泰山府君は）こう言った。「使いの童子を遣り、あなた様をお送りしましょう。悪者の集団に攻められるのを恐れてのことです」。そして、自ら使いの童子一名に命じ、慕容仁軌を送らせた。雙陸棋が七局済んだところで、その童子が帰ってきて、すでに送り終わったと言う。またこうも言った。「慕容県令様は大堂（県令が仕事をする場所）に座ることを恐れて、いまは大堂の東側の先にある小さい部屋にいらっしゃいます」。

沈嘉会はすぐに府君に別れの挨拶をすると、府君は（彼を）ゆるした。沈嘉会は州県官に（事の次第を）つぶさに伝えたが、州官は最初それを信じてくれなかった。そのため、蘭州長史の趙持満は、人を姑臧へ遣わし、慕容仁軌を訪ねさせた。慕容仁軌はこう言った。「去る九月の内、風疾を患い、手足がすこぶる痛かった。それで、三十何カ所に灸（治療）を受けた。家族も、（慕容仁軌の）様子（顔色）がぼんやりしていると感じていた。十一月の初め、ようやく治療が少なくなった」。その日数（期日）を確かめたところ、（沈嘉會の言い分と）相違がなかった。県

尉が阿趙を拷問して殺したことも、みな事実であって、県尉は病を患い、十日で死んだ。

沈嘉会が初めて府君に謁見したとき、家族は彼の魂魄が朦朧としてしまったように感じていた。それからほどなくして、（家族は）毎日『金剛般若経』を読み、これを日課とした。（そして沈嘉会は）郷里に戻って来られ、現在に至るのである。［丘貞明による。後に郎余令が沈嘉会に会った際も、説明は同じだった。］

3　任五娘

（本文）

又曰、龍朔元年、洛州景福寺比丘尼修行、房中有一供侍童女任五娘死、修行爲立靈座。經於月餘、其姉及妹弟於夜中忽聞靈座上呻吟、其弟初甚恐懼、後乃問之。答曰、「我生時於寺中食肉、坐此大受苦痛。我體上有瘡、恐汙床席、汝可多將灰置床上也」。弟依其言、置灰後看床上、大有膿血。語弟曰、「姉患不能縫衣、汝大襤褸、宜將布來、我爲汝作衫及韈［音袜］」。弟置布於靈床上、經宿卽成。又語其姉曰、「兒小時患染、遂殺一螃蟹取汁、塗瘡得差。今入刀林地獄、肉中見有折刀七枚、願姉慈流、爲作功德救助。知姉煎迫、卒不濟辨、但隨身衣服、無益死者、今並未壞、請以用之」。姉未報、間乃曰、「兒取去」。良久又曰、「衣服已來、見在床上」。其姉試往視之、乃是所斂之服也。姉遂送至淨土寺寶獻師處、憑寫金剛般若經、每寫一卷了、卽報云、「已出一刀」。凡寫七卷了、乃云、「七刀並得出。訖今蒙福助、卽往託生」。與姉及弟哭別而去。［吳興沈玄法說、與淨土寺僧智整所說亦同］

（校異）

なし

（大意）

また別の話である。龍朔元年（六六一年）、洛州景福寺にある比丘尼の修行者部屋にいた使いの侍童女である任五娘が死んだ。修行者は彼女のために霊座をたてた。一月あまりが経った頃、その姉および妹弟が、夜中に突然、霊座（の上）からする呻き声を聞いた。弟は初めは甚だ怖がっていて、後になってから（任五娘の声を）聞いた。（任五娘は弟への）返事としてこう言った。「私は生きている間に寺内で肉を食したので、ここにいて大きな苦痛を受けているの。私の体には瘡があって、霊座を汚すかもしれない。あなたは灰を多く床上に置いておくれ。」弟は言われた通り、床上に灰を置いた。その後で見ると、（灰の上に）たくさんの膿血があった。（任五娘はふたたび）弟に語ってこう言った。「（もう一

人の）姉は（病を）患っていて、衣服を縫うことができない。あなたの服は大いに襤褸だから、適当な布を持って来ておくれ。私があなたに服と靴下を作ってあげよう」。弟が布を霊座（の上）に置くと、一夜で（服が）できた。

また、（任五娘は）その姉に語ってこう言った。「私は子供の時に病にかかったので、カニを一匹殺して汁をとって、瘡に塗って治した。今、刀林地獄に入って、体内に折れた刀が七枚もあるのが見えている。姉さまの慈悲にすがりたい、（私のために）功徳を作って助けておくれ。姉さまがせっぱ詰まっている（困窮している）のは知っている。急には、それをして助けることはできないでしょう。しかし、（私が）身に着けている衣服は、死者にとっては役に立たないもの。未だに破れていないので、どうぞ、これを使って下さい」。姉が返事をしないでいると、しばらくしてこう言った。「私がとるわ」。もう少し時間が経ってから、またこう言った。「衣服はすでにあります。床上にあるから、見てちょうだい」。

姉が試みに見に行くと、それは葬儀の時に着せた服であった。そこで、姉は（その服を）浄土寺宝猷師のところに送り、それをもって、『金剛般若経』を書いてもらった。一巻を書き終わる度に、（任五娘は）すぐに報告してこう言った。「刀が一つ出た」。全部（まとめて）七巻が書き終わると、言った。「刀七つがすべて出ました。今までの福の助けのお陰で、すぐに生まれ変わりに行けます」。（こうして任五娘は）姉や弟と泣いて別れて行った。［呉興の沈玄法による。浄土寺の僧、智整の話に同じ。］

（本文）

贊曰、有情曰凡、無愛爲聖。惟罪生滅、随心垢淨。正念忘懷、卽邪爲正、六纏九惱、同歸實性。

（校異）

なし

（大意）

賛に言うことには、「一切の生き物は凡夫と言い、欲望のない心のあり方を聖人となす。（ここから、）罪が生まれたり滅したりするありさまに思いをいたし、汚れたり清浄になったりする心のありかたに従いゆく。正しい想念を持ち、心を無にして執着を捨てれば、たちまち邪念は正念となり、六つの煩悩・九つの苦悩も、同様に真理に帰するのである」と。